

各関係機関団体の長 } 殿
各病虫害防除員

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

平成30年度病虫害発生予察技術情報第6号について

このことについて、病虫害発生予察技術情報第6号(キャベツの菌核病)を発表したので送付します。

技術情報第6号

キャベツの菌核病について

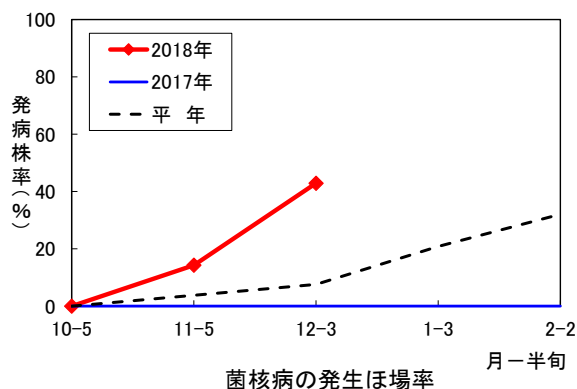
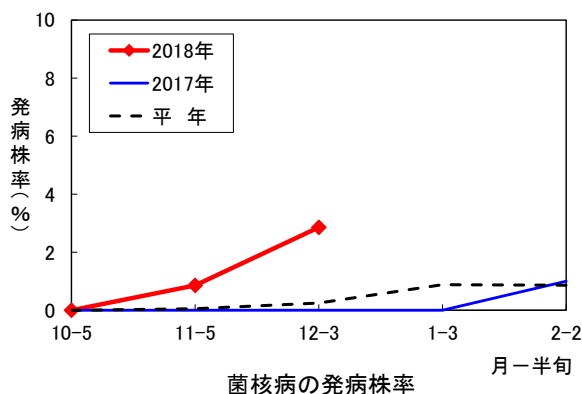
1 対象作物名: キャベツ

2 病虫害名: 菌核病

3 発生状況

キャベツの菌核病については、11月5半旬の予察調査で発生量が平年よりやや多く、12月3半旬調査でさらに発生量が平年より多くなりました。向こう一か月の気象予報では、平均気温が平年より高く、降水量も並か多いため、今後さらに発生量が増加する恐れがあります。

- ・12月3半旬の発病株率 2.9% (平年 0.3%、前年 0%)
- ・12月3半旬の発生ほ場率 42.9% (平年 7.6%、前年 0%)



4 防除上注意すべき事項

(1) 生態

- ①病原菌は、被害部に生じる菌核によって越冬し、畑土壌中では2～3年生存するが、湛水中では死滅する。
- ②菌核は、春もしくは秋に発芽して、キノコ状の子のう盤を形成する。子のう盤には多数の子のう胞子が生じ、この子のう胞子が飛散して、一次感染が起こる。
- ③子のう盤の形成には、適度な水分と15～20℃の温度が必要である。このため、秋冬作では、通常11～12月に雨が多いと多発する。しかし、暖冬の年には1～2月にも多発する。

(2) 防除対策

- ①防除適期は結球開始期である。株元に薬液が十分かかるように丁寧に散布する。
- ②発病株は早めに抜き取り処分する。

(3) 次作に向けての防除対策

- ①本年度の多発は、気象的な要因に加え、前年度に発病した菌核が土壌中に多数残っていたことが原因と考えられる。対策は水稻を作付けするか、夏季に湛水すると、菌核を減らし被害を軽減できる。
- ②収穫終了後は、春季の子のう盤形成適期（4月下旬頃）になる前に反転耕を行い、菌核を5～10cmよりも深く埋没させると、子のう盤の形成を抑えることができる。
- ③前作での発生状況や当年の気象状況から、多発が予想される場合には、結球初期から予防的に薬剤散布を心がける。なお、薬剤散布は、初発部位である株元に十分かかるように行う。



株元の初期病徴



結球部に形成されたネズミの糞状の菌核

菌核病の病徴